

技術と社会部門 2020 年度部門賞 部門功績賞受賞者挨拶

部門功績賞を拝受して

黒田 孝春(長岡技術科学大学)

この度は、日本機械学会・技術と社会部門功績賞を受賞の栄誉を賜りましたことに際しまして、会員皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

部門活動を振り返りますと、約10年前の2010年に88期部門長としての英国ヨークの鉄道博物館での部門国際会議(ICBTT2010)は非常に印象に残る思い出です。上空からのホワイトブリテン、歴代のSLが立ち並ぶ鉄道博物館での講演会や懇親会の様子が今でも忘れられません。これらの会議やSLの歴史や文化を訪ねての見学会を含めた一連のイベントが実現できたのは綿貫先生・堤先生をはじめ部門の先生方の多大なご尽力によるもので心より感謝申し上げます。

2016年部門賞の吉田先生が受賞メッセージで本部門の特色を率直かつ見事に述べられたように、『技術(機械)』と『社会(人・教育)』の接点の役割を担う分野であり、日本機械学会が誇るべき存在としての部門であり、機械の専門家の枠に留まらない経験ができます。機械遺産の認定に関わる調査等もその一環としての部門が果たすべき役割です。

幸いにも私は2010～2019までの10年間、調査等の委員として関わらせて頂きました。この間、先輩方に支えられながら調査対象には歴史的価値と共に「社会(人)」との関りを常に着目しながら向かい合ってきました。特に思い出深い二点を簡単にご紹介させていただきます。まずは『しんかい2000』です。遺産としての年齢は古くないですが、母船との一体システムなど次世代へ継承された様々な工夫と性能を有し、多くの歴史的発見や引退後も水族館に展示され多くの子供たちに夢を与えています。もう一つは、昭和2年の『自由粉砕機 第1号機』です。後継機が現在も食品、薬品から鉱工業用品など幅広い分野で社会生活に不可欠な「製粉」として活躍しています。衝撃柱で強い衝撃力とせん断力で原料を粉砕し、熱の発生を抑えながら迅速かつ大量の粉体加工の基本技術は約100年近くも踏襲されています。いずれも、技術と社会を結ぶ代表的な遺産の一つではないでしょうか。

現在、社会インフラの技術発展は予想をはるかに超えるペースで進み、インターネットの著しい普及で世界の距離を意識せずにコミュニケーションが取れる便利な環境が実現され、国際会議なども自宅で参加が容易となりました。一方、配信された情報の正誤に関わらず容易には削除が難しいことへの倫理観が求められています。このような技術の光と影において、機械分野に留まらず技術全般を包含する本部門が機械学会の先頭として『社会的使命の役割』を今後も果たし続けていかれることを心より期待しております。最後に、お世話になりました部門の皆様には心より感謝申し上げますと共に、当部門の益々のご発展を祈念申し上げます。

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.45

(C)著作権:2022 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門